

プロニスワフ・ピウスツキのみた平取

73

ピウスツキとアイヌ研究

B.ピウスツキ(1866 - 1918)は、ポーランドを代表する近代のアイヌ研究者です。

氏は明治20(1887)年以降、数十年をかけてアイヌの調査・研究に取り組んでいきますが、その発端はロシア皇帝暗殺未遂事件容疑によるサハリンへの流刑でした。その後もウラジヴォストクのアムール地方研究会(OIAK)博物館に採用されてサハリン、北海道へ長期出張するなど、地に足をつけた成果を蓄えていきました。

ピウスツキのフィールドワークでは、当時まだ珍しかったカメラとエジソン式蠟管蓄音機が用いられました。最新の科学機器で現地調査を行ったことで、明治後半代のアイヌ語音声や写真資料が今に残されることになりました。

明治36(1903)年8月～9月初頭に行われた北海道調査直後の9月下旬には、サハリンのアイ(ai)コタンに住むアイヌ女性チェフサンマと結婚し、その後2児をもうけま
す。長男木村助造氏(1971年に富

良野市で逝去)のご子息は現在、当代ピウスツキ家の正統な当主として日本に在住しています。

平取への来訪(図及び資料1)

ピウスツキが平取コタンへ訪れる契機になったのは、W.シエロシェフスキからの書簡で要請された北海道アイヌの共同調査です。

明治36(1903)年7月8～10日に函館へ到着したピウスツキは、同地の路上で白老コタンのノムラ・シパンラム(野村芝蘭)と偶然知り合う機会に恵まれ、その友好関係を元に白老での調査を実施します。

その後の平取までの移動は、白老駅から早来駅までが鉄道で、平取までは乗馬となります。途中、鶴川河畔のコタンで宿泊しますが、この来訪はJ.バチェラーから住民に予め知らされており、調査団は「プロテスタント派のキリスト教に改宗したアイヌたち」(シエロシェフスキ著・井上訳 2013)から歓待されます。明治後半代にキリスト教の布教活動が盛んだった土地柄から、この集落は鶴川下流



ピウスツキの肖像写真。1866年ロシア帝国ヴィルノ県ズーウフ(現リトアニア領ザラヴァス)にて出生。第三子で長男、ポーランド貴族の家系であるピウスツキ家の嫡嗣。弟のユゼフはポーランド第二共和国(1918-1939)の初代国家元首

域のチンコタン(現むかわ町汐見)かその周辺域と推定されます。

調査隊は翌日出発し、屋下がりには沙流川の岸辺に出ます。そこで「大放牧地が延々と連なり、そこで初めて、われらは馬群や赤牛の群れを目にした」(同シエロシェフスキ文献)という景観の広がりを記録します。広大な放牧地の連なりは、沙流川下流域を指しているとみられます。つまり調査隊はチンコタンを出発後に海沿いの街道を移動して佐瑠太(現日高町富川)に達し、沙流川沿いに北上して平取へ向かったと考えられます。

平取コタンでは、一週間あまりの滞在の中で「頗る多くの信仰・伝説・古謡」(同シエロシェフスキ文献)が調査された外「土人の熊送り、舞踊の類を活動寫真に撮影」(『小樽新聞』2900号 1903[明治36]年9月17日付：井上 2010)といった実り多い成果が得られます。実際、ピウスツキの学術論文では「平取で聴取した情報にかなり言及」(井上 2013)されています。平

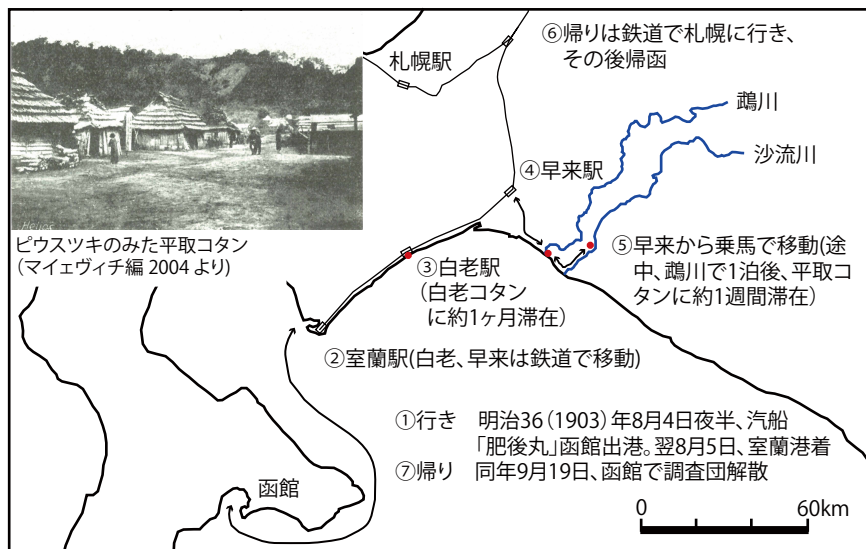


図 ロシア地理協会北海道アイヌ調査団の行程。調査団はW.シエロシェフスキ、B.ピウスツキと日本語通訳の千徳太郎治の3名で組織。主な調査地は白老コタンと平取コタンの2カ所。その後、道東部も調査予定であったが、ロシア大使館からの中止命令により断念

取滞在の半ばには、スパイ疑惑に端を発するロシア大使館からの調査中止命令が伝えられ、急遽札幌経由で函館に戻り、調査団が解散されます。

その後、明治43(1910)年6月初め～翌年1月にはロンドンに滞在し、日英博覧会の「アイヌ村」で10名の沙流アイヌ(門別村2名、平取村1名、二風谷村7名)と会い、50以上の物語を採録します。

結果としてピウスツキが手がけた北海道アイヌの研究資料は、その多くが沙流地方からの収集であったことが分かります。

研究の成果

ピウスツキが録音したアイヌ語音声の蠟管レコードは、総数200-300本位あったと推定されています(大半は未発見)。その内、65本が昭和58(1983)年に北海道大学へ持ち込まれ、当時の科学技術を駆使した再生作業が行われました。結果、この音声資料に19編の北海道方言による口承文芸が確認されました(言語・音楽班 1987)。明治36(1903)年の北海道及びその後の日英博覧会での調査から、この蠟管レコードには少なからず沙流アイヌの音声が含まれていると推定されます。

その外、ピウスツキ研究を札幌から発信する共同研究も行われており『Pilsudskiana de Sapporo』という逐次刊行物が出版されています。また、同名のホームページ

も公開中です。

北海道調査で収集されたアイヌの民具は、ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館及びロシア民族学博物館(ロシア:サンクトペテルブルク)、ライプツィヒ民族学博物館(ドイツ)などに納められています(荻原2013)。邦文の民具図録も幾つか刊行されており(Spbアイヌプロジェクト調査団編 1998など)、どのような収集資料があるのかを閲覧することもできます。

ピウスツキをととした文化交流

平成25(2013)年10月に、ピウスツキのブロンズ胸像がポーランド

共和国文化・民族遺産省から白老町のアイヌ民族博物館へ寄贈されました。第1号記念碑は1991年11月にユジノ・サハリンスクのサハリン州郷土誌博物館に建立されており、白老は世界で2カ所目の設置になります。

また、平成28(2016)年1月からはポーランド南部のジョーリ市博物館において、B.ピウスツキを顕彰する常設展示が設けられています。ピウスツキのアイヌ文化研究とゆかりの深い白老町、平取町と連携しながら設置された展示で、今後、北海道とポーランドの文化交流の架け橋にもなっていくと考えられます。

資料1 ピウスツキによる北海道調査(ロシア地理協会北海道アイヌ調査団)

明治36(1903)年6月6日 コルサコフでシェロシェフスキからの手紙に接する。内容はロシア地理協会による北海道アイヌ調査の同行依頼。その後すぐに樺太アイヌのタロンチ(千徳太郎治)を日本語通訳として雇い入れる

7月8～10日頃 函館港に到着したと推定

8月2日頃 函館の路上で白老アイヌのノムラ・シパンラム(野村芝蘭)と出会う

8月4日夜半 肥後丸に乗船して室蘭港へ向かう。5日早朝に到着し、鉄道で白老に至る。その後、8月末前後までシパンラムらの協力で同地に逗留し、調査を行う

8月末前後の正午 白老駅から早来駅へ列車で移動。到着後、乗馬数頭と道案内を雇い小さな旅籠に1泊。翌日、早来から鶴川まで乗馬で移動し、同地で1泊

翌々日(9月初旬と推定) 沙流川の河岸に達し、同日午後には平取コタン着(約1週間滞在中、長老ペンリウクの協力により調査を進める)。平取調査後は道東方面に移動する予定であったが、ロシア大使館からの調査中止命令により断念

9月10日頃 騎乗で平取を出発。最寄りの鉄道駅(早来駅と想定)に至る。一両日中には札幌に到着。その後、札幌のバチエラー宅に2・3日宿泊する

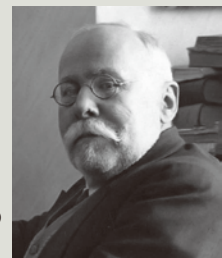
9月15日早朝(?) 札幌駅から室蘭へ移動後、連絡船に乗って同日中に函館へ到着

9月19日 ロシア地理協会調査団が函館で解散。24日にピウスツキと千徳がコルサコフに帰着

資料2 ヴァツワフ・シェロシェフスキ(1858-1945)について

ポーランドの小説家。20代前半に社会主義運動に参加して12年間ヤクート地方に流刑となる(1879-91)。これを契機としてヤクート族やツングース族を扱った小説や民族学的研究を発表。明治33(1900)年にはワルシャワで起こった労働者デモを組織した嫌疑で再逮捕される。その際、イルクーツク流刑の代案として出されたのが北海道アイヌの調査である。

その後、明治36(1903)年に来日し、B.ピウスツキとともにアイヌ研究を手がけた



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

